



晴天の心

立教186年2月号
 大阪府富田林市寿町 4-9-10
 URL:www.tomiishi.net
 TEL:0721-23-3466 090-5243-4669



2月19日大教会より、諭達巡教を受けさせていただきました。祭典終了後、前春近分教会長辻先生の講話を頂きました。

諭達第四号に書かれている真柱様の思いと願い。そして、今すべきこととお話しくできました。

今回の諭達のポイントは、教祖のひながたを辿ること。立教の元一日に思いを巡らせて親神様が教祖を通じて何を望みそしてそれを実現するために、教祖はどう歩まれたのか。今一度、教祖伝を読み返し各々の心に感じたことを、よく思案してそれをこころに定めて、掛からせていただくことで、そしてそれを続けることで大きなご守護を頂くことに繋がる。3年間仕切って通らせていただくことが真の助かりに繋がることになる。

まだ3年千日は始まったばかり、それぞれがかしものかりものを理解し、日頃当たり前のように思っていることに感謝することから、はじめることがスタートラインだと思います。コロナ禍において、当たり前が当たり前でなくなったことがたくさんあったと思います。もう一度ご守護されていることから、素直に神様にもたれけることが、大切なのだと思います。そして、人助けて我が身助かるという、教えを実践することが多くの人を助けることに繋がり、感謝が生まれ陽気ぐらし世界へとう少しづつ歩いていけるのだと思います。どうぞ、今一度諭達を読んで、こころ定めをしてこころ通りの守護を有難く受けさせていただきます。

月次祭 3月19日(日) 午前10時～
 婦人会例会 3月9日(木) 午前10時～

2月11日 石川分教会創立130周年記念祭および五代会長就任奉告祭が執行されました。



当日は、大教会長ご臨席の下、両祭典がおこなわれ、祭典後、諭達巡教もおこなわれました。祭典は、座りつとめとよろづよ八首。おつとめ着を付けて鳴り物をすべてそろえて賑やかに務められました。

祭典後、石川分教会長 豊田厚子さんが、挨拶されこれからの思いを話されました。また、大教会長からも就任に対してのご挨拶があり寄り集った皆様の心を寄せてこれから務めていくようにお話しされました。その後、諭達巡教の講話をしてくださり、すべての予定は滞りなく済ませていただきました。これから石川分教会には豊田厚子会長が生まれ、補佐として上東阪分教会長田中孝則さんが務めてくださいます。どうぞよろしくお願ひします。

立教百八十六年二月十一日 ←
 天理教石川分教会 ←

創立百三十年記念祭・五代会長就任奉告祭 ←

教祖伝逸話編 95.道の二百里も

明治十四年の暮、当時、新潟県の農事試験場に勤めていた大和国川東村の鴻田忠三郎が、休暇をもらって帰国してみると、二、三年前から眼病を患っていた二女のりきが、いよいよ悪くなり、医薬の力を尽したが、失明は時間の問題であるという程になっていた。

家族一同心配しているうちに、年が明けて明治十五年となった。年の初めから、この上は、世に名高い大和国音羽山観世音に願をかけようと、相談していると、その話を聞いた同村の宮森与三郎が、訪ねて来てくれた。宮森は、既に数年前から入信していたのである。

早速お願いしてもらったところ、翌朝は、手の指や菓子がウッスラと見えるようになった。そこで、音羽山詣りはやめにし、三月五日に、夫婦とりきの三人連れでおちばへ帰らせて頂き、七日間滞在させて頂いた。その三日目に、妻のさきは、「私の片目を差し上げますから、どうか娘の儀も、片方だけなりとお救け下され。」と、願をかけたところ、その晩から、さきの片目は次第に見えなくなり、その代わりに、娘のりきの片目は、次第によくなって、すっきりお救け頂いた。この不思議なたすけに感泣した忠三郎は、ここに初めて、信心の決心を堅めた。そして、お屋敷で勤めさせて頂きたいとの思いと、新潟は当時歩いて十六日かかった上から、県へ辞職願を出したところ、許可はなく、「どうしても帰任せよ。」との厳命である。困り果てた忠三郎が、「如何いたしましょうか。」と、教祖に伺うと、「道の二百里も橋かけてある。その方一人より渡る者なし。」との仰せであった。

このお言葉に感激した鴻田は、心の底深くにをいがけおたすけを決意して、三月十七日新潟に向かって勇んで出発した。こうして、新潟布教の第一歩は踏み出されたのである。

144.天に届く理

教祖は明治十七年三月二十四日から四月五日まで奈良監獄所へご苦労下された。その間忠三郎は獄吏から便所掃除を命ぜられた。忠三郎が掃除を終えて教祖の御前に戻ると教祖は、「鴻田はん、こんな所へ連れてきて便所のようなむさい所の掃除をさされて、あなたは、どう思うたかえ。」とお尋ね下されたので、「何をさせて頂いても神様の御用向きを勤めさせて頂きたくと思えば、実に結構でございます。」と申し上げると、教祖の仰せ下さるには「そうそう、どんな辛いことや嫌な事でも結構と思うてすれば、天に届く理、神様受け取り下さる理は、結構に変えて下さる。なれどもえらい仕事、しんどい仕事をなんぼしても、ああ辛いなあ、ああ嫌やなあ、と、不足不足では、天にとどく理は不足になるのやで。」とお諭し下された。

153.お出ましの日

明治十七年頃の話。教祖が、監獄署からお出ましの日が分かって来ると、監獄署の門前には、早くから、人が一杯になって待っている。

そして、「拝んだら、いかん。」と言うて、巡査が止めに廻わっても、一寸でも教祖のお姿が見えると、パチパチと拍手を打って拝んだ。警察は、「人を以て神とするは、警察の許さぬところである。」と言うて、抜剣して止めて歩くが、その後から、又手を打って拝む。

人々は、「命のないところを救けてもろうたら、拝まんといられるかい。たとい、監獄署へ入れられても構わんから、拝むのや。」と言うて拝むのであるから、止めようがなかった。



陽気チャンネル

いまや全国的に知られるようになった「天理教災害救援ひのきしん隊」の活動。29年間、その活動に携わった経験を持つ講師が、被災者をはじめ行政関係者、社会福祉協議会関係者などとの交流を通して感じる教えの素晴らしさを、実体験を交えて力説する。



天理教災害救援ひのきしん隊 WEBサイト
<https://www.tenrikyo.or.jp/jpn/saikyu/>